

京都教区時報

京都教区広報委員会
(編集長 村上透磨)

京都教区本部事務局
京都市中京区
河原町通三条上る

TEL 075-211-3025

FAX 075-211-3041

honbu@kyoto.catholic.jp

Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp> 4345

2021年 司教年頭書簡を受けて

第11回 正義と愛と連帯の必須の抗体

「抗体」と聞くと、感染予防のために、ワクチンを接種して、感染しない体になることと考えます。ところが、今回は、ワクチンを接種しても、発症しないと言い切れないようです。

私は、今まで、インフルエンザのワクチンを接種したことがなかったのですが、コロナに感染していても、自分では気がつかず、人に感染させてしまう恐れがあるというので、ワクチンを接種することにしました。

教皇フランシスコの「パンデミック後の選択」では、「COVID-19のような緊急事態は、まず何よりも連帯の抗体をもって克服される」(56頁)と書かれています。

教皇フランシスコの「ラウダート・シ」では、「わたしたちは新しい普遍的な連帯を必要としています。南アフリカの司教団が述べているように『神の創造のみわざを人間が濫用して生じさせた損傷を修復するためには、あらゆる人の才能と関与が必要です』。わたしたちは皆、神の道具として、被造物を世話するために、おのの自身の文化や経験、自発性や才能に応じた協力ができるの

です」(14)と書かれています。

「正義と愛と連帯の必須の抗体」は、私たち一人ひとりの努力によって作り上げることができるのです。誰かが作ってくれることなく、まして、神がなんとかしてくださるから、何もする必要がないというものでもありません。

では、何ができるのでしょうか。おおげさに考えると、とても私にはできないと考えてしまします。相手のことを思う心があればできるのです。自分の生活スタイルを見直すことで、何かできることを見つけることができるはずです。

京都南部洛東ブロック担当司祭

瀧野正三郎



12
2021

主の降誕おめでとうございます!



約2年前に新型コロナウイルスが流行し始め、その後、いろいろな事がありました。特にミサができなくなったことは、とても寂しかったですし、信徒の皆さんが気の毒でした。私もつらかったです。

そんなパンデミックの中にあっても、私たちは共同体であることを示さなければなりません。共に祈り、共にミサに参加し、共に活動するのです。そのためには、イエス様の恵みと力が必要です。私たちは、パンデミックと一緒に生きるのではなく、イエス様と一緒に生きるのです。

イエス様の誕生は、イエス様が私たちの救い主であることを示しています。私たちは一人ではありません。だから恐れなくてください。

10月10日、第16回通常シノドス(世界代表司教会議)に向けた「歩み」として、教皇フランシスコは開幕式を行いました。開催テーマは「ともに歩む教会のためー交わり、参加、そして宣教」です。「シノドス(ともに歩む)」ということばの通り、全世界が旅をしながら交わりを生き、参加を実現し、宣教する神の民として、新たな道を切り開くことができますように。このシノドスの歩みの上に、聖霊の照らしが豊かにありますように。

イエス様の誕生は私たちのために模範を示しました。イエス様の交わりは、私たち教会共同体だけでなく、全世界のための交わりです。イエス様は人として生まれ、奇跡を行い、祈り、命を捧げました。イエス様はその生涯において、あらゆる場所で良い知らせを宣べ伝え、ご自身の愛と赦しを証しました。

これからは、私たちが、イエス様の誕生の喜びを伝えるために、生活による証しをもって宣教する教会になることが求められています。一緒に歩みましょう。

メリークリスマス!

2021年度 京都司教区オンライン聖書講座

救い・いのち・喜び
—現代におけるキリスト者の使命—

期 間: 2021年5月～11月 (全12回)
配信日時: 下記各曜日 10:30 から配信します (講座時間1時間20分)
配信方法: YouTube 限定配信 (1ヶ月間録画視聴可能)
(申込された受講者に1回、各ご視聴いただきます)

期 日	テーマ	講師
5/13	はじまり—救い・いのち・喜びの始まりは	中川 博通 (京都府立大教授)
5/27	福音—いのちの恵みと希望	大塚 昌通 (京都府立大教授)
6/10	福音社会—恵みと人間的な	西村 隆一 (京都府立大教授)
6/24	平和と国際関係—いのちの恵みと希望	澤田 寛成 (京都府立大教授)
7/8	キリストの異文化性の特徴	宮田 友明 (京都府立大教授)
7/22	神のいのちと救い・いのちの恵み	高 橋 一朗 (京都府立大教授)
8/5	福音のうちにある神のいのちの恵み	阿部 伸典 (京都府立大教授)
8/19	福音のうちにある神のいのちの恵み	北村 孝明 (京都府立大教授)
9/2	福音のうちにある神のいのちの恵み	柳 隆一 (京都府立大教授)
9/16	福音のうちにある神のいのちの恵み	柳 隆一 (京都府立大教授)
10/2	福音のうちにある神のいのちの恵み	一 橋 隆一 (京都府立大教授)
10/16	福音のうちにある神のいのちの恵み	西 村 隆一 (京都府立大教授)
11/3	福音のうちにある神のいのちの恵み	西 村 隆一 (京都府立大教授)
11/17	福音のうちにある神のいのちの恵み	西 村 隆一 (京都府立大教授)

オンライン聖書講座 報告

救い・いのち・喜び
—現代における
キリスト者の使命—



京都司教区聖書委員会

オンライン聖書講座の開講

京都教区の聖書講座は30年以上も続く講座ですが、昨年度はコロナ禍において、中止せざるを得ませんでした。

しかし、聖書講座を開いてこそその聖書委員会。こんな時代だからこそ、聖書のみ言葉を一人でも多くの方に届けたいと思います、昨年度は試みとしてユーチューブで5回シリーズの講座を企画したところ、思いがけず全国から多くの申し込みがありました。手応えを感じ、今年度は

例年通りの講座を、オンラインで行うことにしました。

講座の内容などは聖書委員会担当司祭とスタッフで考えますが、主に担ってくださっているのは村上透磨神父様です。いつも陰から聖書講座を支えてくださっています。

講座の趣意書

講師の神父様方にお送りした講座の趣意書は、次の通りです。

「昨年からコロナウイルス感染症の広がりによって、教会は様々な制約、自粛をしなければならぬ状況に追い込まれました。しかし、そのことによって、キリスト教にとって、何が本質的なことで、何が二次的なものであるかが明確にされてきたように思います。まさに、教会の転換期を迎えているといっても過言ではないでしょう。今回のテーマとしてあげました『救い・いのち・喜び』は、キリスト者に求められるキリスト教の本質に関することであり、また、コロナ禍の中で閉塞感に陥っている現代の教会に問われている、根本的な課題であるとも言えます。教会の諸活動が自粛される中で、わたしたちが、コロナ時代をどのように生きていくのかを模索するための、現代的霊性ともいうべきものです。

講師の神父様方は、オンラインが得意な方ばかりではなく、オンラインは苦手で、やはり対面でないと伝えにくいと

おっしゃる方もおられました。しかし、聖書委員会の意向を理解してください、ご協力いただきました。そして、それぞれ様々な形で動画を撮影してお送りくださいましたので、実に個性豊かな講座となりました。

多数の受講者に感謝！

講座はユーチューブの録画配信で、一か月間視聴できるとあって、受講者の皆さんには大変喜ばれました。最終的な受講者は289名(10名は単発の申込)、京都教区内118名、教区外171名(海外2名、12教区から申込)となりました。受講者の年齢調査はしていませんが、お問い合わせをいただく中でわかるのは、ご高齢の方が多いということです。皆さん、とてもみ言葉に飢え乾き、新しいオンラインという方法にも対応しようとしておられ、その様子に頭が下がる思いがしました。

コロナが落ち着き、対面での講座が開講できるようになるまでは、このオンライン講座を続けていかざるを得ないと思っています。もしかしたら対面講座ができるようになったとしても、オンラインの必要性はなくなるのかもしれません。

来年度の講座は5月開講予定で、現在準備をしています。今後も多くの方に受講していただきますよう、どうぞよろしくお願ひします。

正義と平和協議会 現地学習会
「人道の港 敦賀ムゼウムと
カトリック敦賀教会を訪ねる」

報告 山村暁子

10月9日、緊急事態宣言は解除されましたが、まだまだコロナ終息の見通しがつかない中、新型コロナウイルス感染防止に十分な注意を払いながら、現地学習会を開催することが出来ました。

大陸への玄関 敦賀港

福井県の敦賀港に敦賀ムゼウムという場所があります。「ムゼウム」はポーランド語で博物館という意味です。静かな港町で学んできました。

展示室の入口に、ヨーロッパとウラジオストクを結ぶシベリア鉄道を経由し、敦賀港に到着する経路図が示されています。敦賀港は、江戸幕藩体制下では北前船の寄港地として、近代に入ってから国際貿易港として栄えた港でした。シベリア鉄道開通以前はヨーロッパと日本の往復には南の航路を取らなければならず、移動に時間がかかりましたが、鉄道が開通してからはかなり時間短縮されました。ヨーロッパからの陸路で移動す

る場合は、敦賀港が移動の重要な拠点になっていったことが経路図によってわかります。

敦賀港が大陸との交通の要所であることを確認した後は、シアターで映像を見ました。この2点の導入を経ることで展示に対する理解が進みました。

難民の受け入れ

ムゼウムの展示にはメインが2つあります。ポーランド孤児とユダヤ難民です。

ポーランドは18世紀にロシア、プロシア、オーストリアにより領土が分割され、分割後のポーランド立憲王国はロシ



敦賀ムゼウム 正面玄関

ア帝国に支配されていました。ロシアに隷属することに対してポーランドは何度も反乱を起しますが、その度に抑え込まれ反乱に参加したポーランド人の家族は、シベリアに流刑にされました。やがて1917年にロシア革命が起こり、赤軍(ソビエト軍)と白軍(反革命軍)がシベリア各地で戦うようになります。内戦の結果、シベリアにいたポーランド人は家財産を失って難民になります。内戦に巻き込まれ、飢えと寒さによって家族を失った子どもはおびただしい数にのぼりました。

1920年、日本の政府と赤十字社は、ウラジオストクのポーランド人に要請されて孤児の受け入れを承諾し、敦賀港はその中継点となりました。敦賀での滞在は僅かな期間でしたが、町の人が子どもたちを迎え入れた記録が、歴史的な経緯に加えて展示されています。

ポーランド孤児の受け入れから20年後、ナチスドイツから逃れたユダヤ難民を敦賀港で受け入れます。ユダヤ難民と日本の関わりについては、多くの人が杉原千畝を思い起こすのではないのでしょうか。

敦賀港には、杉原によって発行された「命のビザ」を持つ人たちが、シベリア鉄道を経て到着しました。展示では、敦



賀の町の住人たちが難民を受け入れる際にどのような役割を担ったのか、様々な種類の記録によってわかるようになっていきます。とりわけ興味深いものとして、町の人の証言を集めた展示があります。迎え入れについては、自発的に支援をしたという住民から、不安な気持ちを持っていたという住民まで、様々な反応があったことがわかります。当時の空気に触れることができる資料となっています。

また、ムゼウムでは、杉原千畝と根井三郎（ウラジオストク日本領事館日本領事代理）によるインタビュー録音を聞くことができます。日本はイタリア、ドイツと同盟を結んでいたため、ユダヤ難民にビザを支給することを厳しく制限していました。命令に背く形で杉原はビザを発行し、根井もまたビザの再検閲をする

ようにという外務省の命令をはねのけ、杉原からのバトンを受け継いで難民を日本行きの船に乗せたことを語っています。

見学を終えて

敦賀ムゼウムは大きい建物ではないのですが、資料が充実していることに加えて、見せ方に工夫が凝らしてあるため、見ごたえのある博物館でした。

一連の展示を通して、難民は紛争や人権侵害から故郷を追われ、逃げざるを得ない人びとのことであると認識しました。そして、法律が正しいものであるとは限らないこと、命と人権が軽視されるという法の間違いに対して、取るべき態度や難民をめぐる現在の日本の状況についても考えさせられました。機会があれば、是非行って、見てください。

また、いまでも起きている国際紛争、国内紛争、難民・移民問題を、私たちももっと学んでいかなければと思いました。

ムゼウム見学の後、カトリック敦賀教会を訪問しました。敦賀教会ではキキ神父様（聖心布教会 インドネシアのご出身）が迎えてくださいました。正平協担当の奥村神父と共に、敦賀での学習会が無事に開催出来たことを感謝し、皆で祈

りました。

参加者からは

・敦賀にこんな歴史があるなんて驚きでした。

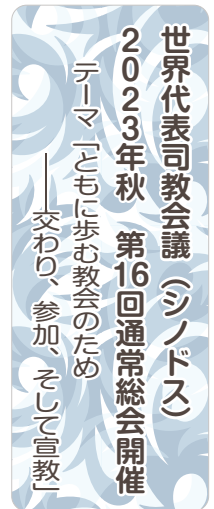
・資料館の内容も豊かで知らなかったことも多くあり、啓発されました。日本の難民移住者の受け入れ態勢はどうなっているのでしょうか。

・杉原千畝が命を懸けて送り出した難民の方々を、命を懸けて受け入れた外交官の方々に敬意を払います。

・1世紀近く昔の出来事であるが、今の時代を生きる私たちへの強いメッセージを感じる。自分だけ、自分の家族だけ、自分の国だけが良ければという考えや行動に「ノー」を発していきたい。などのご感想を頂きました。



カトリック敦賀教会



教会の重大な方向を決める時には、全世界の司教たちが集まって決めます。最近では、第二バチカン公会議が、1962～1965年にかけて開催されました。司教たちは、それぞれの教区での活動もありますので、10～12月に集まって会議をしました。

世界代表司教会議（シノドス）は、公会議で決められたことを、具体的に実行するために、各国司教団の代表が集まり、会議をします。第1回通常総会は、1967年4月に開催されました。

一番よく知られているのは、1974年に開かれた第3回世界代表司教会議です。この時は、教会の福音をのべ伝える使命と役割について、「福音化」というテーマに焦点



をあてて考察し、分かち合われました。その成果を、第二バチカン公会議閉幕10周年にあたる、1975年12月8日に、教皇パウロ六世が、使徒的勧告「福音宣教」として発表されました。

シノダリティ（シノドス性）

ところで、今回の世界代表司教会議（シノドス）は、今までとは違ったものとなります。

シノダリティ（シノドス性）は、今まで使われていなかった言葉です。

2015年10月17日に開催された世界代表司教会議設立50周年記念式典で、教皇フランシスコは、以下のような演説をされました。

『「シノドス性」は、教会を構成するひとつの側面として、この同じ位階制の職務を理解するために、もっとも適切な解釈の枠組みを与えてくれます。聖ヨハネ・クリゾストモが言うように、『教会とシノドスとは同義語である』ということとをわしたちが理解するならば（教会は、神の民が主キリストに向かう歴史の旅路を『共に歩む』ことに他ならないのですから）、その中では、誰も他の人の『上に』立つことなどできないということとも理解できます。むしろ教会の中では、旅路において兄弟姉妹に仕えるため、人は自らを『低く』する必要があるのです。

『「シノドス性」の実践の第一のレベルは、部分教会において実現します。教会共同体全体の利益のために、司祭と信徒がその中で司教と協力するように呼ばれている教区代表者会議（教区シノドス）について言及した後、『新教会法典』は、各地の教会における『交わりの組織』と通常呼ばれる『司祭評議会』『顧問団』『祭式者会』『司牧評議会』について、多くのスペースを割いています。これらの組織が、『現場』とつながっていればいるほど、また人々や、日常の問題から出発していればいるほど、シノドス的な教会を形成し始めることができるのです。これらの手段は時に問題をはらんでいますが、傾聴と分かち合いの機会を提供するものとして重視されなければなりません』。

広報委員会担当司祭 瀧野正三郎

教皇フランシスコによる開会ミサ

教皇フランシスコは、10月10日（日）、バチカンの聖ペトロ大聖堂で、「世界代表司教会議第16回通常総会」の開会ミサを捧げられました。

これによって、「シノダリティ」をテーマに掲げ、地方教会から、地域・大陸の集いを経て、2023年10月ローマで行われる世界の司教たちとの会議へと



世界代表司教会議 第16回通常総会 開会ミサ
2021年10月10日 バチカン 聖ペトロ大聖堂

向かう、今回のシノドスの大きな歩みがスタートしました。

教皇はミサの中で、「今日、シノドスの行程を開始するにあたり、わたしたちキリスト教共同体が、神のなさり方に倣い、歴史の中を歩みながら人類の様々な出来事を分かち合っているかを、教皇・司教・司祭・修道者・信徒たち、一人ひとりが自問しなければならぬ」と話されました。シノドスを行うとは、同じ道を共に歩むことを意味する、と述べられました。そして、この日の福音朗読のイエスがある金持ちの男と出会う箇所（マルコ10章17―30節）を取り上げられました。イエスが金持ちの男と「出会ひ」、

彼の問いに「耳を傾け」、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいかを「識別する」手助けをしたことに注目し、シノドスにおいても、この「出会う」「耳を傾ける」「識別する」という3つの態度が重要である、と語られました。

出会いと相互の傾聴によって対話が始まることで、わたしたちは議論し、歩みながら、以前とは違うものになっていきます。教皇は、シノドスは霊的識別の歩みであり、その識別は礼拝と祈りとみことばに触れる中で行われるもの、と述べられました。

神のみことばは、わたしたちを識別に向かって開き、光で照らします。そして、シノドスが教会の研究会議や政治的会議ではなく、恵みのイベント、聖霊に導かれたいやしのプロセスとなるよう方向づけてくれる、と教皇は話されました。そして、これから始まるシノドスの行程において、よき歩みを共にしていこう、とすべての人々に呼びかけられました。

今回のシノドスのテーマは、「ともに歩む教会のため―交わり、参加、そして宣教―です。教会にゆだねられた使命に従って福音をのべ伝える教会の刷新のため、それぞれの現場で、聖職者、修道者、そして信徒がどのような経験をし、困難に遭遇し、どのように霊に導かれているか」という声を、世界中から集めていきま

す。（参考・バチカンニュース、カトリック中央協議会／文責・広報委員会）

シノドスのための祈り

聖霊よ、わたしたちはあなたの前に立ち、あなたのみ名によって集います。

わたしたちのもとに来て、とどまり、一人ひとりの心にお住まいください。

わたしたちに進むべき道を教え、どのように歩めばよいか示してください。弱く、罪深いわたしたちが、

一致を乱さないよう支えてください。

無知によって誤った道に引き込まれず、偏見に惑わされないよう導いてください。

あなたのうちに一致を見いだすことができますように。

わたしたちが永遠のいのちへの旅を続け、真理と正義の道を迷わずに

歩むことができますように。

このすべてを、
いっどこにおいても働いておられる

あなたに願います。

御父と御子の交わりの中で、世々とこしえに。
アーメン。



大塚司教の12月のスケジュール

新型コロナウイルス感染症の影響のため、スケジュールが変更される場合がありますので、最新の情報は京都司教区のホームページにてご確認ください。



12月のお知らせ

教 区

広報委員会

※ 2月号の原稿締切り日は12月15日㊥です。

諸 団 体

京都カトリック混声合唱団

練 習：12日㊥ 14:00 洛星宗教研究館
25日㊥ 18:00

ミサ奉仕後 河原町教会聖堂

現在活動休止中。再開時、団員には連絡します。

問合せ：075(951)4283 則武 隆

コーロ・チェレステ(女声コーラス)

練 習：9日㊥、23日㊥ 10:30

河原町教会2階楽廊

問合せ：075(701)3303 岡田久美

点訳版「京都教区時報」〈無料〉ご希望の方は『カ
障連大阪フレンドリー点字部』嶺崎 (たけざき)
裕子さんまでお申込みください。
Tel・Fax/079 (431) 8601

聴覚障がい者の会・京都グループ

クリスマス手話ミサ

日 時：7日㊥ 14:00

場 所：都の聖母(河原町教会地下小聖堂)

感染防止対策の上、自己判断でご参加く
ださい。

問合せ：080(2286)5314 岩佐

心のともしび ラジオ番組案内

(全国34局で放送)

K B S 京都 ㊥～㊤ 朝 5:55

㊥ 朝 5:15

ラジオ関西 ㊥～㊤ 朝 5:00

㊥ 朝 6:05

12月のテーマ「喜びの日」

ホームページもご覧ください。

<https://www.tomoshihi.or.jp/>

感染症などによる行事の変更などは各団
体にご確認ください。



こんにちは。運営委員の近況報告第4回です！

私事ですが、去年の3月に長かった京都での学生生活を終え、コロナ禍の影響もありましたが、運よく奈良で建築事務所に就職することができました。そしてようやく1年が経ったところです。とにかく必死に働いていたので、あっという間だと感じています。担当の現場が実家から自転車ですら15分だと知った時は引越を嘆いたものです…往復3時間で半年通いました(笑)。

さて、毎日が師走のような生活でしたが、運悪く9月にコロナウイルスに感染してしまいました。職場の理解もあり、今は良いのか悪いのかゆったりとした時間を過ごさせています。苦しまれている方もたくさんおられると思いますが、僕は結構ポジティブに捉えています。

今はちょうど生活にも慣れてきたので、また忙しくなる前に近くのお店を開拓したり、登山したり、色々足を運べたらと思っています。京都にいた時も山に囲まれていましたが、奈良も山だらけで結構目移りしてしまいます。今後も青年センターはイベントを企画しています。お会いした際にはぜひ皆さんおすすめの山を教えてください！

運営委員／田辺教会 松浦 隼人

つながりネットワーク 若いようコミュニケーション

京都カトリック青年センター

青年センターは、教区を越える青少年活動について
京都教区の窓口となるとともに、京都教区内の各教会、
青年の各種活動をバックアップするための機関です。



← 青年センターのHPも
見てね！



青年センターあんでな